

## 『詩の中の戦争と風土』

2015年08月15日

宮崎県の延岡の教会の牧師をしていた時、地元で根ざした若い詩人の本多寿氏と出会った。1992年に、詩壇の登竜門と言われるH氏賞を受賞した。受賞のため上京したが、東京はイヤだと言って、すぐに宮崎に帰ったという新聞記事を読んだことがあった。本多氏らしいと思った。キリスト教の月刊誌『福音と世界』に柴崎聡氏が「詩の喜び 詩の悲しみ」を連載し、本多氏の「死の網」を紹介していた。その頃から、本多氏との交流が再開し、メールで詩を、また、出版した詩集を送ってもらうようになった。

先日、8月15日初版発行の『詩の中の戦争と風土 宮崎の光と影』を送ってくれた。宮崎県で生まれた人、宮崎県に住まった人など、11人の詩人を取り上げ、彼らの生と詩に、戦争と風土がどのような影響を与えたかを探り、解説している。詩の言葉は無限の飛躍があり、その射程距離の広さに驚く。

本多氏は、敗戦記念日を発行日としていることから、反戦・平和を強く打ち出して、出版している。戦後、朝鮮から引き揚げて都城に住んだ真田亀久代は、中国残留孤児をテーマに「まいごのひと」を歌っている。「まいごのひとがかえって来た／とりかえしもつかない三十年を／しずかにはにかんで …／やさしいひとにちがいがなかった／みんなのかわりに／なにかを背負っているようにみえた／とても重そうな／みえない重荷のようにみえた／— 日本の国のつぐないを／ひとりでひきうけているみたい／— みんなのための道しるべとなって／じぶんをさらしているみたい」。旧満州生まれの私も残留孤児になる可能性はあった。彼らが日本の犯した罪を償っていると見る目は限りなく優しい。

南邦和も朝鮮からの引き揚げ者である。「九条—自伝風に」で平和への願いを歌っている。「ヒロシマ・ナガサキの　そしてオキナワの／死者たちに誓って第九条は生まれた／アジアの民への贖罪と慰藉の証として／（中略）九条は　日本人同士の間では無い／アジアの民への　世界への誓約なのだ」。武器を持たず戦争しない九条はアジアへの贖罪である。だから、九条を守り抜きたいと願う。

大山鐵也は宮崎市で生まれ、豊かな自然の中で詩を書き続けた人で「蟻と黙禱」で下記のように歌っている。「黙禱をつげるチャイムが鳴りひびく／長崎に原爆が投下された時間だ／畑の草をとっていたぼくは立ちあがり／汗をぬぐい　ナガサキの方向にむかって／目をとじ　手をあわせる／（中略）ぼくは蟻を　そっとつまんで畑にかえず／一匹の蟻が　ぼくといっしょに／黙とうしたかはわからない　ただ／その時間を共有したのは事実である」。本多氏は「蟻への謝罪が、そのまま人間の所業に対する抗議となっているところが胸を打つ詩だ」と解説している。罪責は殺された人間だけでなく、蟻にも向いている精神の高さに感動する。謝罪を込め、祈り合う人々によって、平和は実現していく。

宮崎の空、海、山、川は美しい。懐かしく思い出しながら、土や草木の香りがする詩を楽しく読ませてもらった。

本多氏は私の感謝と感想に対し、返事をくれた。「『詩の中の戦争と風土』を早速お読みいただき有り難うございます。これは私なりに危機的状況に対する抗議の表明としての1冊と位置付けたものなので、大いに励まされます。アメリカの御用達のような現内閣の、解釈改憲の一連の発言と強引な国会運営は、すでに戦犯と呼ぶべきものでしょう。自民党・公明党が数を頼りにしている図は暴走族をはるかに超えた集団です。不服従の精神を、今いちど甦らせつつ、鍛え直さなければならないと思っています。」